園のおたより

第　２　号

令和８年５月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

園庭での様子

園長　大向　隆三

新緑のまぶしい季節となりました。今年は例年と比べて暑くなるのが少し早いのではと思いますが、園庭ではこどもたちの元気な声が響きわたり、毎日が生き生きとした活動にあふれています。鬼ごっこやかけっこ、ボール遊びや砂遊びに夢中になるこどもたちの姿は実に楽しそうで、見ている私まで自然と笑顔になり幸せな気分にさせてくれます。

時には私もこどもたちの遊び相手になることがありますが、こどもたちの元気のよさには驚かされるばかりです。（正確には、私が「遊んでもらっている」と言うべきかもしれません。）少し一緒に遊ぶだけで私のほうは息切れしてしまいます。平気な顔をして全身を使い元気いっぱいに走りまわるこどもたちには大きな力が秘められていると感じますし、そのように遊ぶ日々の経験は健やかな成長につながっているのだと実感します。

また、この時期の園庭は自然とのふれ合いの宝庫です。こどもたちは咲き誇る花々に目を輝かせ、小さな虫（てんとう虫やダンゴムシ）も大好きです。これらを見つけてはそっと手に取り、一生懸命観察しています。形、色、動き方など、子どもたちの興味と関心はどんどん大きくなっていき、さながら「生物学者」のようです。土の感触も味わいつつ夢中で遊ぶ姿からは、五感を通して世界を感じ取っている様子が伝わってきます。このような体験は単に知識からでは得られない豊かな学びとなり、こどもたちの心の発育に大きな影響を与えてくれることでしょう。偶然この原稿の作成中に新聞記事で、ダンゴムシが食べた物を体の中で代謝する仕組みを利用して新しい材料を開発する最新の研究成果を目にしました。こどもたちの中から、将来このような研究に取り組む科学者やエンジニアが現れてきてくれそうですね。

行動して、自ら感じ、考え、発見する。これらの積み重ねが今後の成長の土台になることと思います。こどもたちが自分の力で世界を広げてゆく姿を大切に見守りながら、安心してのびのび過ごせる環境を整えてまいります。

引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

「雰囲気」や「居心地」

副園長　小谷　宜路

今年度の本園での研究は、「遊びを通した幼児教育」の重要性について、広くいろいろな人に理解してもらうためには、どのように伝えていったらよいか、具体的な発信の方法を試行していく一年としました。文部科学省からの委託である「幼児教育の学び強化事業」をお引き受けすることと兼ねての研究となり、全国の国立大学附属幼稚園・こども園の先生方からの協力も得ながら、一年間の取り組みをスタートしたところです。

写真や動画などが日常的なものとなり、保育の場面も、写真・動画といった媒体で記録することが容易になりました。言葉（話し言葉、書き言葉）の記録だけでは伝えきれない部分を補完するツールとなっています。ただ、写真や動画が、「遊びを通した幼児教育」をすべて記録し、伝えられるかと言えば、そうではありません。写真や動画では、表情や動き、話し声など、視覚的・聴覚的な出来事は捉えやすくなりますが、香りや味、湿度や気温、空気や風などの出来事は、なかなか留めておきにくいものです。一方で、言葉で保育を計画したり記録したりする際には、「落ち着いた雰囲気となるように…」とか「一人一人にとって居心地のよい場を見つけて…」といった言葉で表すことがよくあります。「雰囲気」や「居心地」という言葉には、視覚的・聴覚的に捉えられものだけでなく、身体全部を使いながら感じ取るものを含んでいるように思います。「遊びを通した幼児教育」の重要性を発信していく上では、身体性（こどもの身体性、大人の身体性）が幼児教育の大切な要素の一つであることを、意識していきたいと考えています。

今月は、３組と１組で保護者の方に「保育参加」いただく機会をもちました。短いひとときでしたが、お寄せいただいた感想の中には、お子さんと一緒の場に身を置き、一緒に遊んだことで、こどもたちが日々過ごしている生活を、実感として楽しんでいただけたお応えも多くありました。毎日の降園時のお話しや、毎月の園だよりなどでも、保育の様子をお伝えしていますが、保育参加では、実際の「雰囲気」や「居心地」を含めた「遊びを通した幼児教育」を体感していただいたのかと思います。

こどもたちとの毎日には、言葉にできないことがたくさんあり、むしろ言葉にできないものの中に重要なものがあるようにも日々感じています。「雰囲気」や「居心地」といった言葉でそれがうまく伝わるのか、それとも、もっと別の言葉で幼児教育の重要性を伝えることができるのか、はたまた、言葉とは違った方法で（言葉にすることと合わせて）伝えていくことが有効なのか、一年の研究の中で考えを深めていく機会にしたいと思います。

クラスだより

１くみ

「名前」

　着替えやお弁当が始まり、園で過ごす時間も長くなりました。目にとまる一つ一つに触れて、心地よさを感じる場所、物、人の中で生活する姿があります。また、一緒に生活する友達や先生たちの名前も次第にわかってきて、名前を呼ぶことに嬉しさを感じる姿が見られます。

　ある日のお弁当の時間、なかなか席が決まらずに迷っている人がいました。お弁当を食べる席は自分で決めているのですが、いくつか空いている場所がある中でなかなか決められなかったようです。すると、近くにいた人が「〇〇ちゃん ここ空いているよ」と教えてくれました。迷っていた人はニコッと笑ってその席に座ることにしました。もしかするとその席が空いていることは分かっていたことかもしれません。それでも、教えてくれたやさしさと、“名前を知っていてくれていたこと”、“名前を呼んでくれたこと”の嬉しい気持ちが表れたような姿でした。嬉しさがじんわりとにじんでいくように、食事の間にも名前を呼びあう姿がありました。

　別の日のお弁当の時間には、たまたま同じテーブルになった二人が、お話や言葉の響きが面白く、なかなかお弁当が食べ終わらないほど笑い合っていました。弁当箱の片づけをしながら、一緒に話をしていると、「この子がね、笑ったんだ」と一方の人が言いました。「〇〇ちゃんだよ」と名前を伝えると、「〇〇ちゃんかぁ」と味わう様に声に出しながら微笑む姿がありました。

　お家の人からもらった大切な名前は一人に一つ。どこへいっても「私」が「私」である拠り所になります。また、名前を呼びあうことで少しずつ人と人との間にあるものが変化していくような気がします。名前を呼び、名前を通してつながっていくこどもたちの姿に触れ、一回一回名前を大切に呼びたいと感じています。

２くみ

「自分の気持ち」

２組で遊ぶことを楽しむ中で、一緒に過ごしている人がどんな人たちなのか感じながら過ごす姿が見られるようになってきました。一緒にいると心地よい人や遊ぶと楽しい人などが見つかり、互いに声をかけて一緒に遊んでいます。

そんな友達との関わりの中で、それぞれの"自分はこうしたい"が重なり合うこともあります。

ある日、保育室内にある大きな積み木の近くで「〇〇が先に、Ａちゃんと遊ぶんだ」と言い合う２人の声が聞こえてきました。それぞれの話を聞いてみると「ぼくが先に約束してたんだ」とどちらも自分の思いを教えてくれました。一緒に遊びたい相手のＡさんは何と言っているのか尋ねてみると、言い合いしていた２人はびっくりしたような顔になり、「聞いてない」とのこと。そこでＡさんに聞いてみることにしました。２人はＡさんの「車を作ってから外にいきたい」という思いが分かると、「ぼくはＡちゃんと遊びたいから一緒に車作っていい？」と１人はその場に残り、もう１人は外で遊びたいからと外で待つことにして、それぞれがＡさんの一言をきっかけに自分の気持ちを確かめていました。お弁当時や降園時には、「〇〇ちゃんの隣に座りたい」と座りたい場所が友達と重なってしまうことがあります。どうしても座りたくて友達がいない間に椅子をずらしてしまったり、「もう遊ばないから」と相手の気持ちを閉ざしてしまったりすることもあります。その行動や言葉の裏には、「一緒に座りたい」「今は別の人と過ごしたい」など、言葉にならないけれど大切にしたいそれぞれの思いがあります。一緒に考えていく中で、「隣に座れるようにここを広くしようよ」と座り方を考えたり、周りの人にいる人が「ここに座ったらどうかな？」とアイデアを出してくれたり、自分の気持ちも相手の気持ちも大切にしようと動いてみる姿も見られます。

うまく思いを言葉にできないときに聞こえる「もう遊ばない」などの言葉の中には、その人のいろいろや気持ちが隠れています。どんな気持ちでも自分自身の気持ちとして大切にしながら、その表し方やその時々の確かめ方を一緒に考えていきたいと思います。

３くみ

「こどもと自然のこと」

３組周辺には、ふかふかの土に小松菜、カブ、サツマイモ、小豆が植えてあります。こどもたちは毎日水やりだけでなく、その日の様子をよく見ています。

小豆。鯉のぼりを小豆の煮汁で染めるその前に、触ったり、香ったり、固さを感じたりしました。水に浸しておいたら固い豆が少しずつ柔らかくなり、中から芽が出てきました。それからにょきにょきと大きくなったので先日、畑に植えました。

小松菜。春の土用の前に種を蒔きました。それから間引きをして食べました。おかげで大きく大きくなっています。なんといっても土が元気です。みんなで土作りをした日は 4 月のこと。土にもごはんが必要だと確かめて夢中で土づくりをしました。手で優しく混ぜて少しずつふかふかになると、手から心地よさが体に伝わり、静かに土に向かうひとときになりました。大きく育った小松菜は、美味しい味噌汁を作って食べることになったので、お薬が入ってなく美味しくお米の美味しい地域の味噌を求めて買い物に出かけました。お店には秘伝の「生味噌」が冷蔵庫にありました。麹が発酵を続けているので、ずっと美味しく食べられるそうです。やっと手に入れた美味しい味噌をみんなでお味噌汁にして食べるので楽しみです。

土の中のことです。微生物たちは、落ち葉や枯草といった有機物を分解し、植物が吸収しやすい形の栄養素に変える役割をしています。外から肥料を与えなくても、土の中で自然に養分がつくられて循環できるようになると、作物は十分に育つことができるのです。水はけ、空気の通り、表層の温度など、微生物が活動しやすい条件を整えることで、土は「自ら育つ力」を取り戻します。教育目標と同じです。自然の循環は、こどもの育ちにもつながります。「自ら育つ」には、こどもの本来もつ、あるがままとして生きている素晴らしさをよく見て聴いて大切にすること、伸び伸びと育つ適切な環境を整えること、よく待つこと‥大人の見方で排除しないことを含めて、こどもの生き方を尊び、大人の生き方を点検することが重要なのではないかと考えています。

食べることに意欲的な３組さんは、育てることにも驚くほどに意欲的です。収穫ができたら何をして食べようかと、みんなで話してわくわくしています。この人たちならどんなことがあっても立派な野菜を育てられそうな気がしています。